

平成 30 年 度

第 2 回総合教育会議会議録

(開会 平成31年 1月30日)

(閉会 平成31年 1月30日)

岐阜県可児市教育委員会

平成31年 1月30日午後 2時00分開会

出席者

富田成輝君（市長）

星野京子君（教育委員）

伊藤小百合君（教育委員）

村瀬雅也君（事務局長）

籠橋義朗君（教育長）

生駒隆昌君（教育委員）

丹羽千明君（教育委員）

三品芳則君（学校教育課長）

教育委員会事務局職員

石原雅行君（教育総務課総務係長）

圓藤 亨君（教育総務課総務係）

開会の宣告

事務局長（村瀬雅也君） 平成30年度第 2 回総合教育会議の開催を宣告。

あいさつ

市長（富田成輝君） どの市町村でも人口減少、少子化という事態を迎え、これまで以上に教育の果たす役割は大きくなっていく。せっかくの機会であるため今回も有意義なご意見をいただきたい。

議題

市長（富田成輝君） 可児市教育大綱は、平成27年 9 月 1 日に策定されたもの。

次期中期計画とはいわゆる総合計画のことで、現段階で検討しているのは計画期間を 8 年として、何を重点的にやっていくのかをわかりやすく示し、それが毎年の予算の大枠にもなるというもの。市民がそれを見れば、行政が 8 年間かけて具体的に何をやるうとしているのかがおおよそ把握できる。

教育においても同様に、8 年間のうちに例えば大規模改修が必要な学校であるとか、統合の問題が生じる可能性など掲載すべきものは何なのか。

そのため今回は、現行の教育大綱について変更、追加すべき点があるのかということと、これに基づく中期計画と教育基本計画に何を掲載すべきなのかといったことについて、ご意見をいただきたい。

教育委員（星野京子君） 本日、今渡北小学校で児童と一緒に給食を食べてきたところだが、「笑顔の学校」というように、楽しくおいしく食べてきた。同校は児童数も外国籍児童も多く大変なこともあるかと思うが、皆が伸び伸びと楽しそうに食べる姿を見て、個人的には現行の教育大綱でよいのではと思う。

教育委員（生駒隆昌君） 可児市の小中学校はみな笑顔が溢れているが、大規模校もあり兼山のような小規模校もある。8 年という期間の中で、学校の統合、分校、エリア変更等の学校規模の適正化について我々も考える必要がある。

また、現行の教育大綱には外国籍児童について具体的な記載はないため、外国籍児童についてと学校規模の適正化について、今後どういった流れになるのかが一番の議題かと思う。

市長（富田成輝君） まさにそういったことが中期計画に掲載されることになると思われる。可児市全体として、公共施設マネジメントの観点からも公共施設の維持が困難とされる中で、8 年の間に増設が必要な学校や逆に校舎をなくすことが可能な所が出てくるのかどうか。早い段階から議論を始める必要がある。

また、外国籍児童についての記載がないのは大綱上、外国籍と日本国籍とを区別する必要は無いとの考えからだが、出入国管理及び難民認定法の改正等に伴い、今後 8 年の間にもっと多様な国から子どもたちが来る可能性がある。そのため、中期計画あるいは

教育基本計画の中にはそれにどう対応するのかについて掲載していかなければならない。どこまで具体的に盛り込むかはまだ不明だが、教育現場でも市役所の窓口においても、今後より多言語化していく中で通訳もさらに必要となるが、すべて雇用で対応というのは経費的にも困難である。翻訳機などの機械に頼らざるを得ない。そういったことも考えていく必要がある。

教育委員（生駒隆昌君） ばら教室のように日本文化を教える場所についても考えていかなければならない。

市長（富田成輝君） その通り。ばら教室のコンセプトは外国籍の子も将来の重要な可児市を支える人材として留まってほしいという思いから、日本人とは違う部分のプラスのサービスを責任もってすべきと考えている。一方で、二、三年で帰国してしまうとなるとどこまで税金を投入して行っていくのかという議論も出てくる可能性がある。

外国人労働者を受け入れる企業がその家族を含め、仕事に限らず日本語や日常生活、社会生活における支援を行う必要があると考えるが、どこまで責任もって行えるのか。

教育委員（生駒隆昌君） 企業によっても温度差が出る可能性がある。

市長（富田成輝君） 法律上は一号特定技能外国人については労働力として受け入れる企業がその役割を担うが、やはり市としてもこれらを踏まえ計画に盛り込まなくてはならない。

教育委員（伊藤小百合君） 星野委員同様、本日、ふれあい給食として子どもたちと触れ合ってきたが、皆が笑顔で伸び伸びと成長してきている姿が見られることから、今の教育大綱を基本に続けていけたらと思う。

市長（富田成輝君） 全国的に子どもの数が減少する一方、問題を抱える子どもは多い。気楽に遊びに来たり相談したりできる場が必要で、そういった中で課題のある子がいれば少しでも解決に結び付けたい。マーノを設立した一番大きな問題意識でもある。こういった問題意識も教育基本計画等の中に入ってくる。

教育委員（丹羽千明君） 今の子どもたちは人に優しくしたり、他者とのコミュニケーション能力などはできてきたと思う反面、自分の体や命を大切にすることはまだ不十分と思われるため、そういった教育も必要ではないかと思う。

また、教育大綱に載せるというわけではないが、スマートフォン普及に伴ういじめの変化も踏まえる必要はないか。

市長（富田成輝君） スマートフォンについてはおそらく基本計画には掲載されると思われる。スマートフォンを使いたいじめについて議論するにはまずは実態把握が必要だろう。また、スマートフォンに関わるトラブルに巻き込まれないような教育も必要だが、可児市における小中学校の課題としてどういう位置づけをするかは議論すべき。

教育委員（丹羽千明君） 子どもたちの世界が広がるにつれ、そういった可能性も高まる。

市長（富田成輝君） どの段階からそれに対して教えだすのかということもある。

義務教育には二つの面があり、一つは人間として社会に生きていける人間をつくること。もう一つは優良な労働者をつくることである。人間性を育てることと将来自分の望む仕事に就ける力の基礎をつくるということだ。限られたカリキュラムの中でいかにこの二つをバランスよく行うのか。今の国の傾向としてプログラミング教育など職業教育の比率が重いように感じるが、可児市の義務教育としてこの二つのバランスをどう考え、何を選択していくのかということをお皆で議論しなくてはならない。

教育長（籠橋義朗君） 国は、プログラミング教育を推奨しているが、可児市としては、シンプルに子どもたちの興味や好奇心を育てるという原点に戻って今後も考えていきたい。

教育委員（生駒隆昌君） 今現在、「笑顔の学校」ということを大事に我々は進めてきており、今後8年間の計画においてもこれが核だと考えている。市長はどうか。

市長（富田成輝君） 市長という立場で言えば、子どもたちにはできるだけ多く可児市に残ってほしい。幸い可児市は、家族や子どもの頃に笑顔で共に過ごした人たちがいる地域で働くことができる環境にある。あくまで自分が育った地域に残りたいというのがベースにあって、中には世界へ羽ばたいていく子もいる。そういったことが基本にあるような教育がしたい。

教育委員（生駒隆昌君） やはり「笑顔の学校」を卒業してからも、また可児市に戻ってきたり、ふるさと愛を持ってここで勉強したりしてほしい。

市長（富田成輝君） 学校で子どもたちが笑顔にいるということは、先生も笑顔で、家庭でも、地域の人も笑顔でということだ。そういう笑顔のまちでこれからも暮らしたいということにつながる。「笑顔の学校」が「笑顔のまち」になっていく。今後も「笑顔の学校」というのがベースでよいと思う。

教育委員（生駒隆昌君） 「笑顔の学校づくり」を通して「笑顔のまちづくり」になれば、それが本来の可児市としての顔になっていく。

市長（富田成輝君） 外国籍の子も障がいのある子も一緒にというイメージがうまく表現されている。皆と一緒に笑顔でいられる人間に育つというのは何よりも大事なことはないか。今日のふれあい給食でも皆明るくすばらしかった。

教育長（籠橋義朗君） 外国籍の子も違和感なく完全に溶け込んでいた。

教育委員（星野京子君） 話は少し戻るが、多様な子がいる中で低学年のうちは落ち着きがなく、高学年になって勉強が遅れて発達障がいと気づく場合もある。

市長（富田成輝君） そういった場合、少しでも早い段階で親や周りが気づいて、くれよんやマーノが相談の場となって専門家につないでいくということが本当に大事だ。

教育長（籠橋義朗君） ただ、落ち着きがないというのもその子の特性かもしれない。

市長（富田成輝君） 勉強が遅れてできないということがあったとしても、それでいけないという訳ではない。人より優しいとか他にもいいところがたくさんある子かもしれない。勉強ができる子がいたとして、勉強できるのが普通じゃない。

教育長（籠橋義朗君） そういった感覚は先生も陥っているかもしれない。

教育委員（生駒隆昌君） いい子を育てなきゃいけないという感覚。

教育委員（星野京子君） いい子イコール勉強ができる子になってしまう。

市長（富田成輝君） かつては勉強ができて、いい大学へ行って一人前という風潮が親にもあったが、勉強ができる子といい子は違う。

教育委員（星野京子君） いい子の枠は広い。親も自分の考えをそういうふうに固定しないほうがいい。

教育委員（生駒隆昌君） 先日、美術展で特別支援学級の子の作品を見たが、非常に細かく、芸術的センスを感じた。同じトカゲの絵を描いても多様な作品がある。

市長（富田成輝君） 勉強ができる子はできる子すごい。手先が器用な子、絵が上手な子もすごい。そういったことを皆が認めることが重要。

教育長（籠橋義朗君） その子の生きる場所というのはちゃんとあるということ。

市長（富田成輝君） 学力だけでなくそういう自分に自信を持つ子。

いずれにしても、次期中期計画、教育基本計画の策定が来年度から始まるため、よろしくお祈りしたい。今後は、多くの道路や橋、公共施設が老朽化していくなかで、財政基盤をきちんと整え、これらを次世代にどうつないでいくのか、整理する段階によいよ入っていく。こういった議論は簡単ではなく時間がかかるため、早い段階で考えていかなければならない。

それは、学校も同様である。蘇南中学校のように、増設がいつまで続くのか、続かないのか。小規模校については、子どもたちの将来を考えた際に、複式学級がいいのか他校に移るほうがいいのかといった議論をどの段階から積み上げていくのか。

そういった背景を考慮しながら、次期中期計画及び教育基本計画に何を盛り込んでいくのか、今後より議論を深めていきたい。皆さんもそういった観点からも学校現場等を見ていていただきたい。

事務局長（村瀬雅也君） ありがとうございます。本会議の議論により次期教育基本計画等の方向性を確認することができた。

閉会の宣告

市長（富田成輝君） 平成30年度第2回総合教育会議の閉会を宣告。

閉会 午後3時05分